博士論文要旨

奥田真結子

本研究は、16 世紀ネーデルラントの画家であるピーテル=ブリューゲル（以下ブリューゲル）の絵画作品を、民衆文化論を用いて歴史学の方法論で分析するものである。これまで、ブリューゲルの作品の多くは美術史のなかでしか扱われてこなかった。しかし、本論文ではアナール学派やブロニスワフ=ゲレメクの仕事に学びながら、ブリューゲルの作品を芸術作品としてではなく、歴史の史資料として扱うことを新たな分析視覚としている。歴史上のブリューゲルの実像とその歴史学的な位置を明らかにし、ブリューゲルが 16 世紀には抑え込まれつつあった「民衆文化」を擁護する立場をとった人物であったと捉え直す実証研究を行うものである。

本論文は 5 章から成る。第 1 章では、ブリューゲルの生涯と、彼に関する一次史料について述べる。ブリューゲルの詳細な記録については 1604 年に出版されたカレル=ファン=マンデルの『画家伝』が最古のものとなる。そのため、研究者はマンデルの『画家伝』の史料を用いることが必須であるが、今日ではその史料批判を行いながら慎重に分析がなされている。さらに、これまでの美術史家によるブリューゲルの作品解釈論争、すなわち先行研究について述べる。従来の研究は、美術史家によるブリューゲルの農民解釈論争が中心であった。ブリューゲルの「農民観」について、それが愛着、共感といった肯定的なものであったか、粗野、愚鈍という否定的なものであったかという点について意見がわかれていた。

本研究は、上記のような視点に制約されることなく、ブリューゲルの絵画作品を、従来美術史家が行ってきた図像解釈の枠を超えて、歴史学の視点で捉え直そうとするものである。したがって、ブリューゲルの作品を一次史料とし、分析を試みることになる。

第 2 章では、図像史料を読むうえでの方法論を説明する。本論文でブリューゲルの図像史料を分析する際、その方法論を明確にしておくことが重要である。なぜならば、美術史の方法論ではとらえきれなかったブリューゲル像を、歴史学の方法論を用いてより深く理解することを目的としているためである。しかしながら、当然これまでの美術史の方法論の成果を顧みないわけにはいかないので、美術史の方法論についても重要な点を述べていく。その後、歴史学の方法論であるアナール学派の仕事を取りあげ、彼らの仕事が本論文とどのような点で結びつくかを説明する。とりわけ、ピーター=バークの「エリート文化」と「民衆文化」の裂け目の拡大という、中世から近世にかけての人びとの心性の変化に着目し、そのような「中期的持続」の歴史的変化においてブリューゲルの作品がどのように評価できるかという問題意識を明確にする。さらに、彼らの論理は、ピエール=ノラの「記憶の場」という概念を用いることによって、より深い理解を可能にする。ノラの「記憶の場」の定義を援用すれば、ゲレメクやバークのような論理構成を、図像史料においても、ある一定の有効性をもって読み取ることができると主張したい。

第 3 章および第 4 章で、ブリューゲルの作品分析を行う。

第 3 章ではおもにブリューゲルの作品に描かれた農民描写に着目する。ブリューゲルの絵画作品には祭り描写や結婚式、村の縁日といった農村風景が多く描かれる。この点について美術史家はブリューゲルの描く農民の牧歌性や、ブリューゲルの農民に対する愛着といったように、ブリューゲルと農民を別の世界の住人として、ブリューゲルが農民を外側から単なる好奇心で描いたように評価してきた。しかし、本論文は、ブリューゲルは農民世界における祭りや縁日の重要性を理解し、彼らの身振り言語を絵画作品に記憶化したといえるのではないかという仮説を立てる。以上の仮説を前提とし、本論文はノラの枠組を援用しながら、画家の描く絵画作品それ自体が「記憶の場」となり、①描かれた人びとが取り結ぶ「社会的結合関係」(水平的関係)、②描かれた人びととブリューゲルとが取り結ぶ「社会的結合関係」(連帯的関係)、以上 2 種類の目に見えない絆の存在が確認できるということを証明する。

第 4 章では、ブリューゲル作品に見られる盲人や物乞いといった、当時のいわゆる「社会的周縁」と呼ばれる被差別民に着目する。第 4 章ではおもに、ゲレメクの実証的な仕事をもとに分析を行う。ゲレメクの仕事は、本論文とはその対象とする時代に多少のズレはあるものの、15 世紀から 19 世紀にかけてヨーロッパで進行した都市と農村の分離、都市の知識人の認識世界と農村住民の世界との分離、あるいは中心部と周辺部の分離と格差構造の発生について述べている。ブリューゲルの生きた 16 世紀は、「エリート文化」と「民衆文化」が離反を見せ始め、「憐みから縛り首」へと社会が変容する過渡期であった。そのような社会背景を念頭に置き、ブリューゲルの「社会的周縁」のものたちが描かれた図像を再検討し、美術史家の認識の枠組では捉えきれなかったブリューゲルの「社会的周縁」の人びとへの視座を分析する。

第 5 章では、ブリューゲルの絵画作品と他の画家の作品を比較し、ブリューゲルが描いた農民描写が、「農民風俗画」という表面的な部分においてのみ継承され、ブリューゲルの作品に内包された「民衆文化」擁護の視座が薄れていく過程を辿る。「周縁者を見る画家の視座」についての画家たちの態度の変化についても同様な視点から説明する。

以上、各章の議論を受け、「おわりに」ではこれまでの研究課題をまとめ、ブリューゲルという人物が「民衆文化」を擁護した画家であり、彼の作品は文字史料には残らない人々の等身大の「記憶の場」たり得ることを指摘する。そうして、これまでのブリューゲル解釈では見えてこなかった新しいブリューゲル像を構築し、「中期的持続」のなかでブリューゲルを捉えなおすという新しい試みを行う。